

少数民族の暮らしと 旅行者が出会うとき ～ベトナム、サパでの 交流体験を通して



かとう けいこ

(株)まちづくり観光デザインセンター代表取締役
(一社)北海道開発技術センター参事
北海道大学大学院農学院共生基盤学専攻博士課程(D3)在籍。

主な公職は、JAF社員、アイヌ文化ツーリズム検討委員会座長、アドベンチャートラベル推進会議委員、北海道競馬運営委員など。

世界各地には独自の伝統や生活を守り続けている人々がいます。しかし、開発や文明の波が押し寄せ、言語や伝統的な生活が侵されつつあることもまた、事実です。本稿では、自分たちの暮らしを守りつつ、稼ぐ手段としてトレッキングガイドとホームステイを営む、ベトナム北部サパ地区の「今」をレポートします。

観光データから見るベトナムと日本の関係

ベトナム観光総局が2019年1月に発表した2018年の外国人旅行者統計によると、ベトナムを訪れた国籍別旅行者で日本は、中国(約497万人)、韓国(約349万人)に次いで3番目の82万6,674人で、初めて80万人を突破しました。また、日本人旅行者が出かける東南アジア(ASEAN主要6か国)では、長らくタイ、シンガポール、ベトナムという順番でしたが、2017年に初めてベトナムがシンガポールを抜いて2番目になっています。

一方、日本政府観光局(JNTO)が1月16日に発表した訪日外国人旅行者の統計によると、2018年に日本を訪れたベトナム人は前年比26.0%増の38万9,100人(推計値)に上っています。17年の実績を8万人も上回り、過去最高です。ASEAN主要6か国の中で人数では最下位ですが、最大の伸びを示しているのがベトナムなのです。

《ベトナムの旅の概要と、少数民族の村に滞在する 今回の特別ツアーの価格》

- 2018年11月20日札幌発、27日札幌着の5泊7日
ハノイ2泊、サパ1泊、ラオチャイ村(黒モン族)でホームステイ1泊、サパ1泊
26日サパからハノイ空港に向かい日本へ。
- 少数民族のホームステイ&生活体験ツアー1泊2日の
価格(4人のグループツアー料金): 1人US\$114
内訳:トレッキング、体験プログラム2、村への入村料、
サパとラオチャイ村の往復の車代等がUS\$50、
宿泊(朝食つき)がUS\$25、
食事(ランチ2回、夕食1回)がUS\$39
- 日本語からベトナム語の通訳と、英語からモン族の言葉の通訳: 2人に2日間依頼した代金がUS\$330



ベトナムにおける少数民族とは

ベトナムには54の民族がいると言われています。そのなかの一つがキン族でベトナム人口の約8割強を占め、その他に少数民族と呼ばれる民族が53あります。少数民族の多くは今回訪れたサパがある北部や中部域の山岳地帯に住んでいます。険しい山々が多く、ともすれば外の社会と断絶しがちな環境であったからこそ、独自の文化が生まれ守られたのかもしれませんが。

しかし、山岳地帯には耕作可能な土地も乏しく、そのため貧しい暮らしが長かったという現実もあります。かつては少数民族の7～8割が貧困層でしたが政府による財政支援政策の積極的な展開や、後述する若者を中心とした稼ぐための考え方と行動の広がり功を奏し、貧困層から抜け出す人たちが年間に8%程度(2015年9月政府、民族委員会調べ)現れているようです。

世界が目にする山岳リゾート、サパ

今回訪れたサパは首都ハノイから北西に約380kmのホアンリエン山脈の山々に囲まれた海拔1,560mに位置する山間部の高原都市です。ベトナムがフランス領だった頃、300軒の別荘を建て、避暑地として開発された歴史もあり、当時の雰囲気も残っています。ハノイから高速バスで5時間ほど。気候は3月～5月、9月～11月が乾季で過ごしやすく、冬には雪が降ります。サパの最大の特徴は、色とりどりの民族衣装に身を包んだモン族、花モン族、ザオ族、ザイ族、などの山岳



少数民族が多数暮らしていることでしょう。

点在した少数民族の村を巡るトレッキングが欧米人を中心に人気です。観光ウェブサイト「トリップアドバイザー (TripAdvisor)」は、「トラベラーズチョイスアワード2016」で「アジアのトップ10」

を発表した際、6位がサパでした。英文ガイドブック世界一のシェアを誇る「ロンリー・プラネット」が2011年に発表した「世界の散歩に適した観光地10か所」でもサパが選ばれています。その理由として、気候は年中冷涼で一日の中にも四季があり、訪れた人は決してその風景を忘れることはないだろうとの評価がされて

います。今回ホームステイで1泊したラオチャイ村の棚田は、旅行サイト「tuoropia」で「世界で最も美しい棚田11選 (2014年)」にも選出されています。

こうした追い風を受け、2017年に政府はサパ観光区を国家観光区に認定しました。そしてグエン・スアン・フック首相は文化スポーツ観光省および関連当局と協力し、サパ国家観光区の持続的な成長に向けた対策を調査するよう指示を出しています。

サパの魅力～暮らしを感じられるトレッキングツアー

サパ周辺には少数民族の村が点々とあります。どこまでも広がる美しい棚田とトウモロコシ畑があり、そこで彼らが伝統的で素朴な暮らしをしています。労働力としての水牛や食料としてのアヒル、カモ、子豚などが棚田に集まっている光景にもホッとさせられます。さらに、麻の葉やインディゴの葉が自生し、女性たちは麻を紡ぎ、家の裏庭にある藍釜をかき混ぜ、細かな刺繍を施して1年程かけて自分たちの民族衣装を作る生活を守っています。たくましく生きる人の息遣いを感じるために、世界中からたくさんの方がサパを訪れています。

自給自足が当たり前前の豊かな食卓



アイヌ民族の衣装と黒モン族の衣装を
着て交流はますます深まる

たくましい少数民族の若き母親たち

サパの市場や道路では、民族衣装を身にまとい、手芸を施した財布やポーチ、銀製品のアクセサリ、小さな楽器を竹製のかごに満載し歩き回る女性たちをよく見かけます。そして、「チャオ、ハロー」と笑顔であいさつし、「どこから来たのか」、「いつまでいるのか」、「トレッキングはしないのか」、「ホームステイに興味はあるか」と英語で声をかけてきます。よく売れる人を観察していると、英語を話すのは当たり前で、フランス語、ドイツ語、スペイン語、時には日本語を駆使して畳みかけています。「稼ぐために自力で英語を覚えたの。耳からね。英語が話せると暮らしが変わるのよ」と、彼女たちは屈託なく語ります。語学学習の原点、働く意欲と強さを見た気がします。

ハノイの大学に通い通訳になる人、ハノイやサパのホテル、旅行代理店に手作りパンフを持参し営業に行く人も出てきました。少数民族向け、女性向けの融資を使い、主収入を農業から観光業に切り替えて成功している20代、30代の女性も現れています。彼女たちは、「頑張るとすぐに結果が出るから、観光ガイドやホームステイはやりがいがある」と、話します。男性は何をやっているのかと言えば、農作業と家事、ホームステイの清掃、買い物などを行っているようでした。また、ガイドとしてサパに出向く妻をバイクで送迎する姿も多く見ました。こうした分担は母親世代から続くもので、違和感や夫婦間の障壁にはなっていないと、染め物体験工房で指導してくれた、リーチャーミーさん(25歳)は明るく話してくれました。

黒モン族の特徴

サパ周辺に住むモン族の中で約53%を占めるのが黒モン族です。山の中の寒い地域に居住することから、伝統的な家屋は天井が低く、窓がありません。モン族は父系社会で、男性の権力が強く、財産を受け継いでいます。主に族内婚で他の民族との婚姻はほとんどないとのことでした。16~17歳が男女の結婚適齢期とされています。サパに入った初日には、子供を背負ってガイドする若い女性が余りに多いので「自分の妹か弟を背負っているの」と質問したところ、「自分の子供」との返答がほとんどで驚きました。

高い技術の刺繍と染め物

「刺繍は、家族を守る魔除けでもあり、文字を持たない民族が自分たちの物語を言葉の代わりに書き記すためにあります。母はこの地域を代表する名手です」と、黒モン族の20代女性が誇らしく話す姿を見て、私は心を打たれました。黒モン族の濃紺よりもさらに濃く黒い藍染めの衣装は、他の民族とは大きく違い一目でわかるほど有名です。これは虫除けの効果と共に、緑生い茂る大自然の中で自分達の存在を確たるものにするためだと言われています。標高800mから1,800mの高地に住む彼らにとって、黒い衣装はファッション性と独自性の確保と共に、保温の役割も果すそうです。その染め物を作る女性たちの指先は一様に青色で、庭先の物干しには麻を染めた反物や刺繍を施した衣装が干されています。藍染した布地にロウを何十回とすりこみ、光沢をもたせた衣装を作るために、黒モン族はロウケツ染めの高い技術を持っています。銅製のヘラを使い細かな模様を生み出す、芸術性豊かな民族なのです。

少数民族との交流が旅の目的になっている

今回ラオチャイ村とタバン村に1泊2日、そしてサパには2泊3日滞在しました。バス移動中も含め出



黒モン族のガイドと歩くアメリカ人旅行者

会った外国人旅行者に「何を目的に来たのか」などの質問をしました。フランス人、米国人、オーストラリア人、スペイン人、ロシア人、インド人、韓国人から回答を得ました。学生から60歳代のご夫妻まで、老若男女が少数民族を身近に感じる旅行スタイルを選択してサバに来ていることが確認できました。そして、多くが、「ほぼ100%自給自足の食事をする少数民族の家で過ごす時間に魅力を感じていること」がわかりました。

ハノイ在住で今回サバに同行してくれたガイド歴10年のタインさんは、「日本人のお客様を少数民族のホームステイに案内するのは、僕は初めてだった。日本人でホームステイを希望される方は他の国より少ないと思いますよ」と話していました。「自分自身もホームステイは初めての経験で大変よかった。次回は子供を連れて家族で泊まりたい」と、熱心にリサーチしていたのが印象的でした。

ユニークな少数民族との交流に価値を見出すのは、国を問わず好奇心が強い旅慣れた人なのかもしれません。しかし、少数民族との文化交流をしてみたいというマーケットは確実にあり、可能性があると感じました。またサバで多く出会う2つの民族、ザオ族と黒モン族について、サバの観光インフォメーションセンターのスタッフの方が面白い考察をしていました。「ザオ族は、山岳地域の中でも特に高いところに住んでいるため、人との接触も少なく割と内気なところがあります。モン族は山岳地域でも平地に近いところに住んでいるので昔から他族との付き合いも多く、陽気で社交的な人が多い。だから農業から観光への転換も黒モン族が早かったのかもしれないよ」。

さいごに

少数民族の村を訪れる理由は人それぞれだと思います。私は今回の旅の仲間、アイヌ民族の友人たちと共に、誰もが本当に自分らしく生きるとはどういうことなのかを、この目で確認し足で踏みしめ体で記憶した

と考え、現地に赴きました。そこには、水道や下水などのインフラを飛び越えて電気やインターネットなどが整った村がありました。川に水を汲みに行き、料理に使う薪を拾い集めます。そして、遠方からの私たちを歓迎するために一番のご馳走である、アヒルと鶏を土間で絞めて、塩ゆでとローストで出してくださいました。自家製のミントが効いた酒を飲み、黒モン族の楽器ケーンと、アイヌの楽器ムックリでのセッションが繰り返され、忘れられない時間を共有しました。

豚の餌を夕食後や朝食前に当たり前のよう^{くほ}に黙々と切り刻む小学1年生の長男の姿には、逞しさを感じました。一年かけて手作りした少数民族の衣装に身をつつみ、伝統を守り家族を大切にしながら前向きに生活を送る若い人たちと過ごした2日間は、幸せな暮らしとは何かを考えさせてくれる貴重な時間でした。

①家族と良い関係が築けていること、②近所付き合いが良好であること、③美味しい空気と水があること、④自分で育てた美味しい食材が身近にあること、⑤自分の仕事に誇りを持っていること、⑥自分や地域の文化を表現する手段と技術を持っていること、⑦自分も含め周りの人が笑顔であること。

この7つは黒モン族の若い女性たちと話をする中で感じた幸せの形です。全てが揃うのは簡単なことではないかもしれません。

北海道においても、今後はさらに海外からの個人旅行者（FIT）、特別な目的に絞った旅行者（SIT）が増える予想されています。ディープな日本文化、一次産業に近いコミュニティに入り込んで、暮らすように過ごす旅を求める人は実は既に現れています。しかし、地域文化の基層とその変遷、暮らし、文化の意味などを語るガイドは非常に限られています。地域文化を多面的に語る人が育たなければ、文化が経済になりません。こうした課題を乗り越えるひとつの形として、サバの若くてたくましいガイドたちの姿が参考になればと考えています。

